



## 「岐路に立つ歯科界」

坂井 剛 (昭和40年卒)

今年は戦後50年にあたり、当時をしのお様々な行事が行われた。50年代の我々は同窓会100年の後半を日本の激動期と重ね合わせて生きてきた事になる。ひもじい思いを共通の経験として親の仕事を継承し、真面目に日々の診療に励んでいる者がほとんどである。

そんな我々にとって卒後30年間の歯科界の変遷はまさに一遍のドラマを見るごとくである。歯科医師不足で大変忙しい時期もあったが今では開業するまでもに多額の資金が必要であり過剰とも思える歯科医師の参入で、過酷な競争を強いられる状況となってきた。

次の世代は果たしてどんな歯科界で生きていくのか。21世紀の高齢化、少子化の進む日本で我々の置かれる環境はますます厳しくなることが確実である。その最大の要因は歯科医師過剰であり、医療費抑制と歯科疾患の減少がそれに追い討ちをかける形となっている。

どれ程過剰なのか。「今後の歯科医師養成のあり方に関する検討会」が今年2月に行った試算では2025年の歯科医数132,000人に対し需要予測98,000人で、その差34,000人が過剰となる。わずか30年後の予測数値がこれである対応策はまだ検討もされていない。

3年前、野村総研は「わが国における歯科診療報酬体系の基本的あり方に関する研究」の中で15年後の開業歯科医の年収は700万円に半減、対策としては定年制の実施を提言している。我々は後継者の教育費も用意できなくなる事

態がすでに予測されている。“予測される未来”に対しては、勇気を持って対応すれば“希望のもてる将来”に変えることも出来る。今、何もしないでいることは我々の将来を捨て、座して死を待つに等しく、次代の後輩達から無能の謗りを受けるに違いない。“立て！立て！今こそ”である。

日歯代議員として4年半、その間に見てきた歯科界は残念ながら急激な時代の変化や国の医療政策の流れに一步遅れるようである。平成9年に施行予定の地域保健法や介護保険法についても、具体的な対応がまだ明確でない、後手にまわらないように頑張ってもらいたい。

そんな中で平成元年に提唱された“8020運動”は国民にも解りやすく、全国的に順調な広がりを見せている。この運動の基本は個々の歯科医が患者さんのひとりひとりに歯の大切さを認識してもらい様に働きかけることである“かかりつけ歯科医”の姿がそこに見える。

市井の歯医者として生きた父は時代の変化に適応出来ず、赤ひげの姿勢を頑固に守り通して逝った。父の魅力ある生きざまを21世紀に立つ息子にどう伝えればよいのか。東歯に入学していれば無用の心配であったかも、我が同窓会は次の100年も歯科界のリーダーであってほしいと思うのである。

- <キーワード>
- ・ 歯科医師需給調整 (=質の向上)
  - ・ 保険医定年制 (=安心)
  - ・ “8020運動” (=信頼)